



平成30年度 北海道開発局 優良工事等表彰を受賞

北海道開発技術センターは、今年度も北海道開発局優良工事等表彰を受賞しました。業務名は以下の通りです。いただきました評価に恥じないよう、今後もみなさまの信頼と満足を得るために、職員一同、より良い成果品とサービスを提供してまいります。引き続きご指導のほど、宜しくお願い申し上げます。

◆北海道開発局長表彰:

旭川開発建設部管内 協働型道路管理計画策定運營業務(旭川開発建設部)
網走開発建設部管内 道路案内表示検討外一連業務(網走開発建設部)



北海道開発局和泉局長(当時)より表彰を受ける山口理事長



写真01:北海道開発局長表彰の受賞者
(中段左はじから大川戸部長、阿部部長、山口理事長)
写真02:北海道開発局和泉局長より表彰を受ける阿部部長
写真03:北海道開発局和泉局長より表彰を受ける大川戸部長

第34回 寒地技術シンポジウムのお知らせ

第34回寒地技術シンポジウムを札幌市(札幌コンベンションセンター)で開催いたします。寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、参加をお待ちしております。詳しくはホームページ<http://www.decnet.or.jp/>をご覧ください。

- ◆開催日: 2018年12月5日(水)~12月7日(金)
- ◆会場: 札幌コンベンションセンター(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)
- ◆内容:

- ★論文(査読・報告論文共通で口頭発表を行います)
 - (1) 査読論文→登録・査読用概要提出……………受付終了しました
 - (2) 報告論文→登録・概要提出……………受付終了しました
- ★技術展示→お申込み……………受付終了しました
- ★講演論文集(CD-ROM)・概要集(冊子)お申込み(有料)…11/9(金)
- ★聴講→お申込み……………11/22(金)

プログラム
公開は
11月上旬頃の
予定です

お問合せ:
(一社)北海道開発技術センター
「寒地技術シンポジウム」担当係
(担当:向井・新森)
TEL:011-738-3363
FAX:011-738-1889

編集後記 今年も、バス会社合同のバス運転手就職相談会(主催:北海道庁)が開催されました。弊社では、道東と道南エリアでの相談会をお手伝い。路線バスや都市間バスの車両を試乗できることから、来場された方たちは楽しみながら参加されていました。私も、路線バスの車両を運転させていただいたことがあります。あの大きな車両がとてもスムーズに軽々と動き出すのに驚きました。意外と運転しやすいものですね。大きな車両を動かす醍醐味を味わえた大変貴重な体験でした。(M.K)

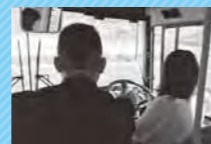


写真:試乗させてもらった弊社の子職員

dec monthly vol.397

2018年10月1日発行 発行人 山口 登美男

発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL(011)738-336 FAX(011)738-1889 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_intfo01@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2018.10.1 vol.397 デックマンスリー



- Monthly Topic (マンズリートピック)
第13回 日本モビリティ・マネジメント会議
- dec Report (デックレポート)
dec自主研究
「沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業」研究発表会

dec Interview >>> 北海道科学大学工学部 都市環境学科 教授 石田 眞二 氏

石田眞二さんは、バリアフリーのまちづくりや道路景観の課題分析など土木工学を基礎に北海道の地域活性化を追究する研究者。今年9月、「持続可能な観光を支える交通サービスの在り方と方法を考える会」を立ち上げ、観光振興への取り組みを本格化されました。その研究視角や意気込みについてうかがいました。

東京の建設コンサルタント会社に勤務された後、札幌にUターンし、母校の大学で教鞭をとっておられます。ご研究の足跡を教えてください。

京都生まれですが、幼少期に札幌に移り、北海道工業大学(現・北海道科学大学)で修士課程(土木工学専攻)を終えるまで札幌で過ごしました。就職した東京の建設コンサルタント会社では、道路の無電柱化やバリアフリーに関する設計業務に携わり、2002年、母校から呼ばれて講師に着任しました。当初、道内の研究動向や人脈について知識がなくて困っていたときにサポート下さったのがdecの原文宏さんです。以来、私の専門や希望に即してさまざまなプロジェクトや共同研究に参加させていただきました。例えば、ドライバーの視点から道路標識や景観はどう捉えられているのか、という道路景観の課題分析の調査はこの頃手がけた仕事の一つです。

そうした支えもあって、06年、中央大学工学研究科の博士号を取得できました。テーマは「GISを活用した車椅子走行

における歩道の最適経路探索システムの開発—札幌市都心部を対象として」。これは札幌市都心部の一街区を対象に歩道路面の平坦性を調べ、車椅子で走行する際にどの程度、負荷がかかるかを指標化して、それが最小になるような経路を探索するナビゲーションシステムをつくるという研究です。バリアフリー研究は、その後、心拍変動を用いた車椅子使用者のストレス計測の研究や「南小樽駅周辺地区バリアフリー基本構想」策定(策定協議会会長として従事)などの取り組みに広がっています。

観光と密接なご研究では、シーニックバイウェイ北海道のルートを対象にしたシークエンス景観の評価の研究がありますね。

「シークエンス景観」とは、走行する車両から見る連続的な道路景観のこと。これを定量的に評価し、シーニックバイウェイ北海道のルートの道路景観の特徴を明確にしようとしたのが、decの原さんにも共同研究者として協力いただいた研究です(『シーニックバイウェイ北海道』指定ルートのシークエンス景観の評価に関する研究』2009年)。シークエンス景観は、訪れた観光客の地域に対するイメージ形成に大きな影響を与えられていると言われており、その客観的な評価手法の確立が求められてきました。そこで、シーニックバイウェイ北海道の富良野、宗谷、知床、ニセコ羊蹄、函館の6エリアから8ルートを選び、移動する車両内から撮影した画像について

北海道を元気にするには
「観光」は避けて通れない研究テーマ。
有効な振興策を打つためには、
データサイエンスの技術が不可欠です。

dec Interview

いしだ しんじ

1971年京都市生まれ。98年北海道工業大学(2014年より北海道科学大学)工学研究科修士課程(土木工学専攻)修了。東京の建設コンサルタント会社勤務を経て2002年道工業大講師に。06年中央大学工学研究科で博士号取得し、同年、道工大助教授。16年より現職。公職に石狩市自転車活用推進協議会会長、小樽地域公共交通活性化協議会副委員長ほか。

構造特性などを分析し、類型化して各エリアの特性を明らかにしました。

シーニックバイウェイ北海道は、全国的な取り組みの「日本風景街道」の先駆けですが、その後、「日本風景街道」の関東甲信越地方のルートについても道路景観の分析を行いました。さらにシーニックバイウェイ北海道を対象に、景観の「北海道らしさ」の定量的評価の方法の開発を試みた研究も行っていきます。「シーニックバイウェイ北海道における道路内部景観の北海道らしさの定量評価手法の開発」(2015年)。

このような道路景観の分析で感じたのは、良いと評価される景観は人により多様であるのに、悪い景観は一致することが多く、そのルート全体について強い印象を残す傾向があることです。多くは市街地の景観で、宣伝のぼり旗のような動くものが代表的。目に入って自分と関係のない情報だとわかると邪魔に感じてしまうのです。研究成果は、今後、シーニックバイウェイ北海道の活動に活用いただけるようにしたいと思っています。

では、初開催された「持続可能な観光を支える交通サービスの在り方と方法を考える会」(9月14日・北海道科学大学)について教えてください。

これまで私の研究活動を支えてくださったたり、共同研究で一緒にやってきた方々に呼びかけ、横串を通すように相互に情報共有する機会をつくりたい、というのが会を開いた動機です。テーマは、北海道にとって、もはや一過性の取り組みでは済まなくなった「観光」をきちんととらえ、それを持続的に支えるための交通サービスとはどのようなかたちが求められるのか、それを探り、分析していこう、ということ。観光に関する研究や開発は、さまざまな領域や形態で行われているので、それを一度、持ち寄って共有するところから始めようと思ったのです。すぐに答えを出そうというのではなく、年に1、2回集まるなかで、それぞれの取り組みのなかで目的意識を持ったり、仕事の仕方について見直したりしてもらえればと思っています。

今回、呼びかけに応じて集まってくださったのは、大学や研究機関、建設

コンサルティングやIT、データ処理関連の民間企業、そして北海道開発局や自治体の方々が30名ほど。プログラムでは、以下のような6本の話題提供をしていただき、意見交換しました。①レンタカーを使用したインバウンドの動態調査について(小島直人氏/構研エンジニアリング(株))、②北海道のインバウンド観光の行動分析について(小竹輝幸氏/㈱ナビタイムジャパン)、③地方版自転車活用推進計画について(上窪健一氏/石狩市企画経済部)、④自転車に関する研究の変遷と今後(金利昭氏/茨城大学)、⑤韓国における高齢者交通対策の現状と課題(朴正郁氏/韓国観光交通研究院)、⑥データサイエンスと観光(鹿島茂氏/中央大学)。



「持続可能な観光を支える交通サービスの在り方と方法を考える会」会場の様子

では、今後の観光への取り組みについて大きな課題と思われることはどのようなことでしょうか。

「観光」の定義をどう捉えるかにもよりますが、直近の課題は観光客の動きを詳しく多角的に捉え、分析し、理解することだと思っています。何を目的に、どこから情報を得て、交通機関は何を使って、どのような経路で動き、消費、滞在しているのか。実は、かつての観光統計データは手法や精度に大きなばらつきがあり、どの程度、観光の実態を反映しているか、信頼性は高いとは言えません。1997年ごろから観光庁でルールを決めて、全国的に一定の精度のあるデータが整ってきましたが、それでも限られた指標のデータしか把握できない。もっと詳細に実態分析しなければ、有効な施策は打てないですね。

もう一つの観光データ分析の難問は、近年のインバウンド増加に見られるように観光に関する数値は右肩上がり、現状では大きな変動がないことです。変動がないとプラス、マイナスの要因を分析できず、傾向をつかみにくい。それを乗り越えるためには、人の

動きに絡む多様な要因に着目し、そのデータを収集、処理、解析する必要があります。つまり、ビッグデータから傾向を読み解くデータサイエンスの技術が大変重要になるのです。また、観光の動向分析には観光行動に密着したデータだけではなく、株価や保健医療など多種多様なデータを取り込んで関係を解析する試みも必要です。

観光振興と言えば、従来はイベント企画などのプロモーションや情報発信が先行しがちでしたが、ビッグデータの蓄積や人工知能の活用が進化した今、データ分析に力を入れて戦略を練る時代になっていると思います。

石狩市の自転車推進計画推進協議会の会長を務められるなど、自転車や公共交通に関する地域振興にも意欲的に取り組まれています。ますます活躍の場は広がりそうですね。

2017年の自転車活用推進法施行を受けて道内自治体でいち早く自転車活用推進計画の策定に着手したのが石狩市です。来年3月までにまとめる予定ですが、サイクルツーリズムの推進とともに、通勤通学やママチャリなど生活交通としての自転車利用についてもきちんとカバーするものでなければと考えています。自転車文化推進のポイントとして注目しているのは、自転車に乗ることの健康への効用です。これを客観的に説明するための保健医学的な調査もいずれ手がけたいですね。

公共交通に関しては、小樽市の地域公共交通活性化協議会に副会長として携わり、観光客に対するアンケートを実施するなど路線バスの利用について課題を探っています。地域住民が減少する一方で、観光客によって公共交通に新たな需要が生まれています。観光の視点からの公共交通の維持促進策が今後、重要になるでしょう。

いろいろな活動をしているので、自分自身でも専門分野がわからなくなることがあります(笑)。周囲の人の意見を聞きながら、いろいろなことに手をつけていきたいと思いますが、大事にしているのは「使う人の側に立つ」という視点。生活のなかで役立つことをやっていきたいし、それによって北海道を元気にすることができたら、と思っています。



交通、移動に関する諸問題の解決を目指すモビリティ・マネジメント(MM)の全国会議(JCOMM)が今年7月27・28日、愛知県豊田市で開催されました。優れた取り組みを表彰するJCOMM賞の各賞が発表され、本年度はプロジェクト賞、デザイン賞各1件を選定。decが参画する取り組みがプロジェクト賞に輝きました。概要などをご紹介します。

[主催](一社)日本モビリティ・マネジメント会議 [共催](公社)土木学会、豊田市ほか]



会場の様子

JCOMMプロジェクト賞を受賞しました!

**高齢者のマイカー依存脱却に向けたモビリティ・マネジメント
～運転免許更新制度の改定を踏まえた公共交通利用促進プロジェクト～**

- ・国土交通省北海道運輸局交通政策部
- ・釧路市地域公共交通活性化協議会
- ・釧路市老人クラブ連合会
- ・一般社団法人北海道開発技術センター
- ・筑波大学公共心理研究室

写真左から渋谷武則首席運輸企画専門官(北海道運輸局釧路運輸支局)、高橋秋彦計画調整官(北海道運輸局交通政策部)、竹口祐二(dec)、根本美里氏・木村航太氏(筑波大学)、新堂聡史係長(北海道運輸局交通政策部交通企画課)

運転免許更新制度の改定(75歳以上高齢者の更新手続の改定)は、高齢者の「運転」という移動手段の喪失にかかわる制度改革です。特に高齢化率の高い地域では、高齢ドライバーの運転が買い物などの家族の生活を支えている現状にあり、運転免許の返納は家族全体が熟慮すべき問題といえます。さらに高齢ドライバーによる交通事故増加などを鑑みると、安心・安全な移動環境創出に向けて、高齢者とその家族のマイカー依存脱却及び公共交通利用促進は極めて社会的要請の高い課題と言えます。

①では、2カ所の高齢者クラブを対象に「路線バス乗り方教室」、「路線バス乗車体験」、「ワークショップ」などのプログラムを実施し、その各段階において戦略的アプローチを実践することで意識変容や行動変容を図り、公共交通の整備状況の違いによる態度変容の差異も検証しました。追跡調査では、参加した高齢者の30.2%が「安易なマイカーを控えるようになった」と回答するなどの成果が得られています。

②では、ブレインストーミングKJ法やプレアンケートなどを用いながら、統計的手順により7つの動機付け情報の有意性を検証しました。また、高齢者・同居家族そ

れぞれに効果的な動機付け情報を選定し、MMツールとして動機付け情報冊子を作成しました。

これらの取組、成果について積極的な周知を行い、自治体や交通事業者の取組を後押ししていきます。

JCOMM実行委員会の選定理由より

高齢者のモビリティという社会的要請の高い課題に対し、同居家族との関係性にも着目し、非常に丁寧なコミュニケーションによって意識・行動の変容を試みています。本プロジェクトはMM展開の戦略性、他地域への応用可能性も高いことから、JCOMMプロジェクト賞として選定されました。



写真: 香嵐渓のかたくりの花

ポスター発表

今回のJCOMMでは、dec研究員が参加した、利尻島、北見市、札幌市、青森県弘前市における取り組みのポスター発表が行われました。概要をご紹介します。



利尻島サイクルバスの運行

- ・石橋 徹、中場 直見(宗谷バス株)
- ・山本 博文、小坂 勝哉(利尻町産業振興課)
- ・杉川 毅(シーニックバイウェイ北海道 宗谷シーニックバイウェイ)
- ・芝崎 拓(一社)北海道開発技術センター)

利尻島(利尻富士町・利尻町)には約25kmの自転車専用道が整備されており、島を一周するサイクリングコース(約55km)を活用しようとサイクルツーリズムが推進されています。本プロジェクトでは、一般旅行者が気軽にサイクリングを楽しむことができ、路線バスの観光利用を促進する目的で、バス車内に自転車をそのまま積載できる「サイクルバス」のサービスを2017年8月1日~10月31日に実施しました。

利尻島には路線バスが合計10便運行しており、そのうち始発と終発を除く6便を自転車積載できるサイクルバスとし、車体に自転車マークを表示。積載スペースは車椅子用の折りたたみ座席スペースを活用しました(車椅子利用がある場合は車椅子優先)。事前予約制を原則とし、料金は1回当たり500円と目的地までの運賃、ただし、1DAYフリーパス(2,000円)購入者はプラス500円で乗り降り自由としました。

期間中の利用者は(延べ人数)14名で、うちフリーパス利用者は9名。また、事前予約は8名。外国人観光客は2名、車種はスポーツタイプが(延べ台数)12台、ママチャリ2台。利用区間はさまざまに積算収入は5,000円でした。

予約受付や運転手の対応などオペレーションに若干の不安があったものの、全般的には円滑に対応することができました。今後の課題として把握できた点では①事前周知の充実、②車内での自転車固定にかかる時間縮減、③利用者が増加した際の対応、などがあります。

地域イベントと連携した親子対象のバス体験ブースの設置

- ・芝崎 拓(一社)北海道開発技術センター)
- ・中 玲奈(北見市企画財政部地域振興課)
- ・佐々木 淳(北海道北見バス株)
- ・高橋 清(北見工業大学社会環境工学科)・久原 賢一(北海道運輸局)



道内で最も広大な自治体である北見市は、公共交通計画及びアクションプラン(2012年策定)を踏まえ、新たな交通システム導入や路線バスの利用促進を図っています。2014年度からは地域で開催されるイベント会場にバスを体験できるブースを設置し、若い世代の親子向けにバスへの肯定的な意識醸成やバス利用促進に取り組んできました。

2017年度は端野町で開催された「第40回たんの太陽まつり」に体験ブースを設置し、①市広報に折り込むニュースレターでイベント告知、②ニュースレター裏面にぬり絵を掲載し、会場に持参するとプレゼントがもらえる企画を実施、③ブースに実際の路線バスを持ち込み、バスの乗り方教室、交通クイズ大会、運転手のコスプレなど各種の体験プログラムを提供、④来場者(保護者)にアンケート実施、を行いました。

その結果、体験プログラムには延べ481名の参加があり、アンケート結果では回答者の約7割が女性、約6割が30代、約7割が市内在住者で、8割以上が普通免許を有し、約6割が「路線バスはほぼ利用しない」と回答しました。一方、9割以上がバス体験ブースについて「満足」と答え、路線バスの利用意向については「機会があれば利用したい」が約7割、「今後利用したい」は1割弱という結果でした。

未来のバス利用者を根気強く育てるために、今後も体験プログラムの見直し・改善を図りながら継続的に取り組みを推進するとともに、学校の授業などを含め、バスに触れる・学ぶ機会を地域全体で増やすことを目指していきます。



市民協働によるローカル線沿線マップ『鰐ぶらり』

- ・伊地知 恭右(一社)北海道開発技術センター)
- ・弘南鉄道大鰐線存続戦略協議会
- ・弘南鉄道株)
- ・弘前市都市環境部都市政策課交通政策推進室

青森県弘前市と大鰐町を結ぶ弘南鉄道大鰐線(全長14km)は、利用者減少による存続問題の渦中にあり、2015年度よりMMをはじめとした各種利用促進策が精力的に実施されてきました。なかでも、住民の利用を促進するため、通勤・通学・通院、そして「おでかけ」による利用について対象別に取り組みを展開してきました。

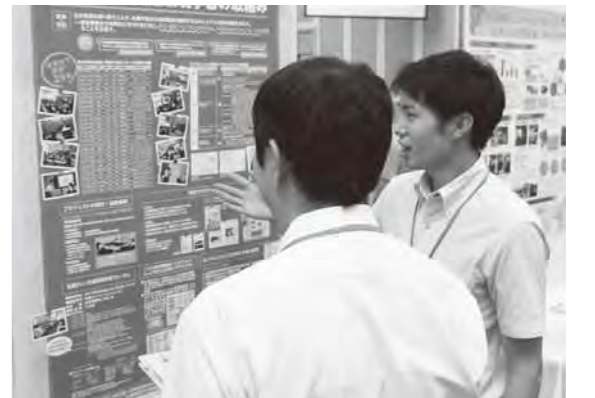
大鰐線魅力発見マップ『鰐ぶらり』は、住民の「おでかけ」の促進を主眼に、幅広く、楽しく「おでかけの目的地提案」ができるよう製作しました。マップ製作には、公募による調査員による「鰐ぶらり調査隊」を結成し、小中学生、大学生、地域おこし協力隊ほか多様な市民の参加を得て、現地調査やワークショップ、モデルツアーなどを実施して、検討を重ねました。

完成したマップは「かぞく編」、「あなば編」、「イベント編」の3種類で計2万8千部を発行しており(弘前市・弘南鉄道などのホームページでダウンロード可)、観光客向けのPRにも活用できるものとなっています。また、製作過程におけるワークショップなどを通じてさまざまな市民を巻き込んだ「関係者」を増やす取り組みとなりました。直接・間接に大鰐線の「応援者」が増加し、今後の利用促進の展開に寄与できたものと考えます。

マップは「子どもと電車の相性の良さ」、「ディープ感とローカル線の相性の良さ」、「イベントと電車の相性の良さ」に着目して構成しており、多様な世代、時期、趣向などに対応できるコンテンツとなったことで、定期券利用者以外の利用拡大が期待できます。今後の利用促進活動においても、マップの一層の活用が重要と考えます。

札幌市内全小学校への拡大的展開を見据えたMM教育の実践的取り組み

- ・佐伯 裕徳、佐藤 格郎(札幌市まちづくり政策局総合交通計画部)
- ・大井 元揮、工藤 みゆき(一社)北海道開発技術センター)
- ・新保 元康(札幌市屯田小学校)
- ・高野 伸栄(北海道大学大学院工学研究院)



札幌市では2011年度策定の総合交通計画においてMMを今後の公共交通利用促進の施策と位置づけており、同年度から13年度まで(公財)交通エコロジー・モビリティ財団に支援いただき、14年度より同市の事業として札幌市内の小学校において「札幌らしい交通環境学習」に取り組んでいます。

具体的には、学校長、教諭、教育委員会職員から成るワーキンググループを設置して研究授業の検討を行い、2011年度から6カ年で、全学年で研究授業を実施。17年度までで延べ29校の小学校で研究授業を実践しました。17年度には教諭や行政職員などを対象とした「札幌らしい交通環境学習フォーラム」(148名参加)を開催し、道内外の参加者にMM教育の周知を図りました。また、14年度には3年生社会科の副読本、15年度には副読本に対応した教師向け指導書を作成し、市内全小学校に配布。授業で利用できる交通環境学習のデータや写真などを作成、収集し、本市のホームページに掲載しました。

こうした取り組みにより、教諭が主体となった授業を実践できたことで、授業プログラムも学習指導要領を踏まえた内容となり、より教育現場の声に寄り添ったMM教育が実践できたと考えます。また、2014年度改訂の「札幌市小学校教育課程編成の手引」にはMM教育の指導案が掲載されました。今後さらに教諭が授業づくりをしやすい環境をつくり、副読本及び教師向け指導書の普及や改訂、授業教材の充実を図って、将来的には市内全小学校で「札幌らしい交通環境学習」の取り組みが拡大することを目指していきます。

dec自主研究

「沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業」研究発表会

シーニックバイウェイ北海道は2018年4月現在、指定ルート13、候補ルート1で、全道で約400団体が活動しています。decはこの活動を支援しており、8月1日、各ルートの事業成果発表と賞選考審査会が札幌のdec会議室で開催されました。今回は複数ルートによる連携事業、単独事業、各3件の発表が行われ、シーニック賞2件と、優勝賞、努力賞各1件が選定されました。受賞4件の取り組みをご紹介します。



最北の大河『天塩川』で つなぐ・つながるプロジェクト

萌える天北オロロンルート、天塩川シーニックバイウェイ

発表者：萌える天北オロロンルート 鹿児島 剛氏

萌える天北オロロンルートの活動団体であるNPO法人「天塩川を清流にする会」は、自然保護・復元活動に取り組んでおり、多くの市民活動団体同様、活動資金確保が課題です。本事業では天塩川の魅力発信と環境保全活動における資金確保方策の検討を目的に、PRグッズ製作に取り組みました。具体的には①PRグッズの内容などの検討、②グッズ製作に向けた事前調査、③試行グッズの製作、④試行販売調査、

⑤検討会議の開催、について「天塩川を清流にする会」と天塩かわまちづくり協議会が中心となって活動を行い、松浦武四郎記念館(三重県松坂市)の連携も得ました。

PRグッズはステッカー、缶バッジ、フラッグについてバイクのツーリング客と一般観光客向けにデザイン案を作成。道の駅など9市町村17カ所でアンケート調査セットを設置して好まれるデザインなどを把握。安価な価格設定を望む声が多



かったことから、道の駅などに置かれ、子どもたちにも人気の「ガチャガチャ」に注目することに。この製品を取り扱う企業(札幌のアカシヤ物産)の協力を得て、特製ピンバッジ10種類を作成し、これを景品とした「天塩川ピンズ」を道の駅など3カ所に設置。フラッグ、ステッカーも製作しました。ガチャガチャは資金調達の一手法として活用をお勧めしたいと思います。



きた北海道エコ・モビリティ商品化 推進事業

宗谷シーニックバイウェイ、天塩川シーニックバイウェイ

発表者：宗谷シーニックバイウェイ 杉川 毅氏

自転車や徒歩、公共交通などを組み合わせて移動自体を楽しむスイス・モビリティの考え方を地域に根付かせたいと取り組んできました。きっかけはインバウンドの増加で、満足度の高いアクティビティ提供を目指しています。

基礎調査・立上期(2015年度)として、①美深一利尻・礼文の自転車試走調査、②スイス・ツェルマット視察、③しまなみ街道視察、などを実施。次の環境整備・PR方法検討期(16年

度)では、①利尻島をモデル地区としたPR、受入環境整備の推進(バスへの自転車積み込みサービスの模索など)、②旭川一宗谷岬の「TEPPENロングライド」(自転車モニターツアー)実施、など。さらに17年度は利尻町の自転車専用道を生かした取り組みを重点に、①利尻島一周サイクリングコース愛称募集(「利尻・彩くるロード」と決定)、②札幌発の利尻島モニターツアー実施、③「TEPPENライド」の継続的実施、④



広域観光周遊ルート認定に伴う取り組みへの協力(台湾、香港からの旅行会社関係者などの受け入れ)、⑤利尻島サイクルバス実証実験のサポート、などを行いました。

今後は、これまで積み上げたものをしっかり展開させていくとともに、周辺自治体の自転車受入環境整備をサポートし、さらに北海道開発局のモデルルートを軸に各地域でのバイウェイサイクルルート(協道)創出にも取り組みたいと考えます。



会場の様子



どうなんフットパス・ロード及び歴史の道 掘り起こし資源調査整備推進事業

どうなん・追分シーニックバイウェイルート

発表者：どうなん・追分シーニックバイウェイ 今泉 欣也氏

本ルートでは「道」を軸に歴史や文化の継承を核とした活動を行い、2018年5月で設立10年を迎えました。本事業の目的は、これまで積み重ねてきた地域資源に関するデータを活用して独自性の高い観光周遊マップを作成することで、事業内容は①各地域の資源をとりまとめ、史実調査を実施、②専門学識者による講演・視察、③先進地域視察、④地域資源をPRするマップ作成と周遊ルートの提案、です。ま

ず、学習会などで資源情報を収集・検証する一方、学識者を地域にお招きし、講演会と街歩き、懇親会など実際の周遊体験を踏まえた地域資源に関する意見をいただきました。また、ルートのメンバーの道外視察として青森県津軽地方に出向き、安藤の郷探訪(国指定史跡)や弘前寺町散策を体験。観光ガイドや民間ボランティアの水準の高さが印象づけられ、参考になりました。

このような過程を経て「どうなん



フットパス・ロードマップ」が完成。QRコードをつけてスマホで豊富な情報が読める工夫をし、周遊ルートも提案しています。マップ作成の取り組みは新聞や刊行物(『マルシェノルド』(一財)北海道開発協会)にも掲載され、マップの取り組みやルートのPRを図ることができました。今後さらにフットパスを生かした取り組みを展開させ、各地域で研鑽を重ね、マップを更新していきたいと思っています。



シーニックバイウェイのPR、地域情報発信、 地域ブランド商品の販売を兼ねた 複合型シーニックスポット(仮称)の検討

釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ

発表者：釧路湿原・阿寒・摩周シーニックバイウェイ 大橋 勝憲氏

中標津は従来の観光コースでは通過されてしまうことが多く、地域の観光への意識も高くない現状にあります。代表的観光スポットの開陽台(展望館)も中標津町中心部まで10kmと離れており、独自の土産物がないなど魅力不足が否めません。本事業では①開陽台を訪れた観光客が中標津町内に立ち寄りたくなるしくみをつくる、②開陽台ならではの土産や思い出体験を提供する、を目的に取り組みました。

①については開陽台展望館内に地域情報掲示板とインフォメーションカードを設置(2017年9~10月)。町内22施設の情報を示した地図を掲示し、各店の情報を掲載したカードを自由に取れるように備えるとともに、シーニックバイウェイや北根室ランチウェイ(フットパス)の活動紹介をするシーニック・スペースを設けました。オリジナル商品の開発では、間伐材を活用した木製のメッセージプレートを作成。メッセージを



館内に掲示できるようにしたところ、昨年夏から10月末の期間で約1,500枚30万円を売り上げ、館内も掲示でにぎやかになりました。今年度も継続予定です。

今夏、長野の(株)マイクロジェット(3Dプリンターなどの開発企業)が研修で中標津を訪れ、冷涼な気候と食や温泉が楽しめる環境を高く評価してくれました。今後、同社との交流が深まり、観光やルートの活動に刺激を与えてくれることを期待しています。

文責:dec